

敦煌と莫高窟

一 漢魏の敦煌

わが国の最も早い地理書『禹貢』は、「天下」を九州に分けており、今日の河西の広大な地域はその雍州に属している。したがって秦以前の敦煌とは「禹貢の雍州の域」であった。もっとも『禹貢』の「三危既に宅し、三苗丕叙す」の記載、あるいは『堯典』の「三苗を三危に竄つ」、『左伝』の「故の允姓の奸は瓜州に居す」等の記載からは、漢代以降、人びとが敦煌を知るところとなり、また敦煌の東南に位置する山が三危山としてその名

施 萍 亭

鄧 健 吾
安 田 治 樹 (訳)

を知られるようになったと見られ、そのため以後の集注典籍は往々にして三危、三苗と敦煌、瓜州を関係づけ、それが代々積み重なってほとんど定説にすらなっている。実際は、「三危は遠く、敦煌に在せず⁽¹⁾」という説もあり、秦以前の敦煌の情況については、なお今後の考古学的発見に俟たねばならない。

秦は六国を統一し、長城を築いたが、西は臨洮を出ることがなかった。そしてこの時、河西は月氏の居所であった。漢の初め、月氏が匈奴の侵寇を受け、西遷を余儀なくされると、匈奴の渾邪王、休屠王が月氏の故地に幕

を張った。前一二一年、渾邪王が休屠王を殺して漢に降るや、漢は河西の地をことごとく収め、武帝の元鼎六年（前一一一）には河西走廊の西端に敦煌郡を置き、文字によって知られる敦煌の歴史がここに始まる。

漢武帝の敦煌郡設置ののち、引き続いて玉門関、陽関が置かれ、敦煌は中国と西方を結ぶ交通の咽喉の地となつていった。この後、史書に記される敦煌は、しばしば詩の一節として詠われる。すなわち、東漢の応劭は敦煌の二字を解釈して「敦は大なり、煌は盛なり」と言い、南朝の劉昭の引く『耆旧記』には「国は乾位に当り、地は艮に墟を列ばす。水に懸泉の神有り、山に鳴沙の異有り。川に蛇虺無く、沢に兕虎無く、華戎の交わるところの一大都会たり」と説かれる。さらに隋の裴矩は『西域図記序』で、西域の交通の「総湊するは敦煌、これ其の咽喉の地なり」と記し、『肅州志・沙州衛志』にも「雪山を城と為し、青海を池と為し、鳴沙を環と為し、党河を帯と為し、前の陽関、後の玉門（ここでは唐以後の玉門関をさし、今日の安西双塔堡一帯にあたる）、伊西を控えて北漠を制すは、全陝の咽喉、極辺の鎖鑰（錠と鍵）なり」

往求められれば「言大なる者に節を予け、言小なる者を副と為」した。これら正副使節が西域を往還する際、敦煌は常にその必経の地であつた。当時西域へ派遣された使者は、多い時には年に十数隊、少ない時で五、六隊、各隊は数百人、少ない隊でも百余人に達し、伴った物品は張騫西域出使の範に倣い、張騫の第二次西域出使の際には、各人に馬二頭あて、牛や羊は万を数え、さらに金貨と絹織物の値「数千巨万」を所持した。毎年このように大量の人や馬、牛、羊、貨物が敦煌を通過したのであり、その「使者、道に相望まる」といった壮観を、われわれは今日なお想ひうかべることができる。

前一〇四年、漢は貳師將軍李広利を遣わして大宛に遠征させたが、途中阻まれて彼の地に到らず、二年にして敦煌に返して返した。李広利は撤兵を求めたが、武帝は激怒し、特使欄截を玉門関に発して、敢て関に入るものがあらば、直ちに斬首とすべき旨命を下した。李広利はやむなく敦煌に駐屯し、一年余りの後、六万余の大軍と十万頭の牛、三万頭の馬を整え、再び敦煌を出発することとなるが、糧食を運ぶ驢や駝だけをとってみても一

とあって、班超父子の疏・議、あるいは辺疆の詩人たちの詩なども、また人びとを感動させ、いまも千古の輝きを放っている。

ところで、日本の学者藤田豊八氏の考究によると、「敦煌」の二字は都貨羅 Tokhar の訳音とすることができるといふ。ここで言う都貨羅は、漢の初めに敦煌と祁連の間に居住した月氏族をさしている。漢語で「敦煌」の文字の初見は『史記』大宛列伝で、そこでは張騫が漢の武帝への報告として「始め月氏は、敦煌、祁連の間に居る」と記されている。祁連が匈奴の「天」の訳音である以上、「敦煌」もまた胡語とすべきであろう。ただこれを胡語として斥けることができないと同時に、われわれは東漢の応劭による解釈がすでに字義に適い、それが漢の武帝以来の敦煌の実際にも適っていたと見ていい。

張騫が西域を通じ、侯貴頭に封じられると、かつて張騫の第二次西域行に同行した吏士たちが相争つて上表し、「外国の奇怪の利害を言ひ」、使節として派遣されることを求めたが、武帝もまた「其の道を広げん」と、往

万頭以上を数え、さらに国中の流罪の者や罪人が糧食の運搬にあてられ、そうした人びとの流れ、車の列が路々にひしめきあつて敦煌へ続くというありさまであつた。

元封六年（前一〇五）、武帝は江都王劉建の女細君を公主として烏孫王のもとに嫁がせるとともに、数多くの礼物、官員、随従数百人をこれに贈った。細君の死後、漢はまた楚王劉戊の孫女解憂を公主として遠く烏孫に嫁がせた。公主が塞を出て敦煌を過ぎる際には、官員が送迎し、武衛の者が随従して、その規模、壮観のさまは一般の使節の出行とは比べようもなかった。宣帝の元康元年（前六五）には、龜茲王とその夫人烏孫公主が漢に朝貢し、漢はこれに賜うに車騎、旗鼓、歌吹を以てし、また綺繡雜繒等数千万を贈り、官員や侍従、車騎が浩々湯々と敦煌を経由して行き来した。神爵二年（前六〇）になると、烏孫は使者三百人を遣わして婚を求めた。宣帝は相夫を公主として官員侍御百余人を同行させ、丁重にこれを敦煌まで送った。しかし未だ塞を出ぬうちに烏孫に事態の急変があり、副使常恵は公主一行を敦煌にとどめるとともに、上表してその状況を報告している。

以上に掲げた史実は、それぞれが「敦は大なり、煌は盛なり」ということを物語るものである。しかしながら、敦煌の両漢における地位はこうしたことにとどまらない。すなわち、武帝が張騫を西域に遣わしてから元帝の建昭三年（前三六）にいたる百年の間、漢は楼蘭、姑師を破り、烏孫と連合し、大宛を伐つて匈奴と車師を争い、さらに康居に遠征するなど、およそ征戦の際、敦煌はつねにその前線の補給地としての役割りを担ったのである。

両漢と西域の交通は三百年を下らず、その間正常な關係が維持されたのは二百余年に及び、使者・隊商が塞を出入りし、官署が設置され、屯田戍卒等が置かれるにつれ、敦煌は漢と西域との經濟文化交流の咽喉の地となつていった。

ところで両漢の西域經營はあたかも一幕の活劇に似て、敦煌はそうした漢朝の演出する活劇の舞台裏であつたとも言えるが、同時にその西域政策の耳目でもあり、この場合事の成否は往々敦煌太守に関わつた。たとえば建武一七年（後四一）、莎車王賢は使者を遣わして都護を

献ぜられんことを求め、光武帝は西域都護の印綬を授けたが、敦煌太守裴遵の上表して反対するにあい、あらためて大將軍を授けたところ、莎車の使者はこれに従わず、やむなく裴遵がその都護の印綬を強引に奪い取り、ためにこれより莎車と事を構えることが多くなつた。また光武二十一年（後四五）には、西域十八カ国が自ら「質子」を漢に送り、都護の派遣を求めた。後漢の成立後間もなく、漢はその北辺が未だ不安定であつたことから、これには応えなかった。各国は莎車による併合を恐れ、裴遵に親書を送つて彼らの「侍子」を敦煌にため置き、莎車にはすぐにも漢朝の都護が派遣されるかのように装つたのである。結局都護が派遣されぬままであつたことから、ようやく通つた西域がまた閉ざされただけでなく、北匈奴が機に乗じ攻勢をかけて敦煌にまで迫り、「河西諸郡、城門昼も閉ざす」ことともなつた。その他安帝の時の曹宗、順帝の時の除由など、彼らは漢の為に「忠を尽さん」との想いではあつたが、実際には決して良い結果はもたらさなかつた。ことさらに事を構えた馬達、あるいは怠慢な宋亮などにいたつては、いずれもみ

な「幫倒忙」、すなわち無くもがなの敦煌太守以外の何者でもなかつた。班超の子班勇は、朝廷にあつて諸難を駁して功を上げ、ようやく西域經營の任を自らかちとつたが、これに従事すること永くはなく、「要功荒外（辺境に功をせよ）」の敦煌太守張朗に連座して囹圄の身となり、その努力は水泡に帰してしまつた。当然功を遂げた者もあつたが、惜しいことにその数は寥々たるもので、延光年間（一二二～一二五）、上表して三策を具申した張璠、永和年間（一三六～一四一）、塞外で功あつたものの、史書にその名が知られない裴岑などがそうした人物にあたる。

上は西域都護から下は屯田戍卒にいたるまで、敦煌の地をその帰るべき故郷の象徴としないものはなかつた。班超は西域に在ること三十一年であつたが、晩年には上表して「臣敢て酒泉郡に到るを望まず、ただ生きて玉門の関に入らんことを願うのみ」と訴えている。およそ都護の任を罷り、屯田を廢する時、漢朝は人を遣わしてそれら吏士の迎接にあたらせ、「敦煌を出で、迎えて塞に入る」ことをもつて使命の完遂と見なした。遊子、謫

吏、戍卒等の故郷を想い、親しき人を懷しむありさまは、しばしば「陽関の一曲、悲歌に動ず」と詠われて、人びとにつきない情懷をもたらしてきた。そして今なお、敦煌を訪れるものは誰しも「望古茫々として遠思を動か」さざるを得ないのである。

後漢末年になると天下は大いに乱れ、敦煌では「太守の曠無（職にない）なること二十歳」とも言われ、諸々の豪強の大族が機に乗じて非を為し、悪事を行なつた。彼らは庶民の田圃を侵して併呑し、そのため「小民に立錫の土無く」、また西域が人を派して貢獻するもの、法をまげ、これを遮つたほか、商人たちの交易も彼らの詐取、侮辱にさらされた。太和年間（二二七～二三三）、魏の明帝は曹操を派遣し、かつての綏集都尉の倉慈を敦煌太守に任じた。彼は豪強を抑え、貧弱の者を撫し、刑罰を厳しく断行し、さらに胡商を保護するなどの施策を行なつた。このうち、外国の商人たちが敦煌に到ると「洛に詣んと欲する者は封を為して所を過ぎ、郡より還らんと欲する者は、官、平取して輒ち以て府の見物と共に市を交せしめ、吏民をして道路に護送せしむ」というあり

さまであった。倉慈の死後、吏民は彼の像を描いて追慕し、西域各族も「悉く共に会聚して戊己校尉及長史の治下に哀を發し、或いは刀を以て面を画け、以て血誠を明にし、また為に祠を立て遙か共に之を祠」ったという。倉慈以後の太守に任じられた幾人かは、ともによく「其の跡に循い」、敦煌は相対的に平穩を保った。とりわけ皇甫隆太守は、民に「耨耜を作し、また衍漑を教へ」て、敦煌の農業生産に「庸力を省くこと半を過ぎ、谷五を加えるを得」⁽¹³⁾とせめた。総じて見るのに、三国の初年（黄和三年—二二二）、西域が再び通じてから、その末年にいたるまで、敦煌は中国と西方を結ぶ交通を保証するという点で、当然なすべき作用を果たしたと言える。

すなわち、漢魏の敦煌は、のちに敦煌芸術の花が咲き誇るべく、その肥沃な土壌となつたのである。

二 楽傳、法良、その宗を發す

仏教が中国へ伝えられてからは、敦煌が仏教の中国国内伝播の第一の拠点であつた。伊存授經の伝説然り、漢明帝の永平中の求法然り、また高僧安世高、支婁迦讖、

竺仏朔、支曜、康孟祥等の東来然り、これらはいずれも必ず敦煌を経なければならなかつた。魏晉の間は、東来する高僧はさらに多く、洛陽にもすでに仏寺があり、中国の士族の中にも出家して仏につかえる者も出始めていた。この時期、敦煌という漢文化の基礎が深く根ざした土壌に、仏教を宣揚する麗しい罌粟の花が咲きほころび始めたのである。そして当時、代々永らく敦煌に居住し、訳經すること最も多く、赫々たる名声を得て西晉の仏教を代表する人物であり、⁽¹⁴⁾「敦煌菩薩」と称された竺法護、さらに法護に依つて沙弥となり、のち敦煌にあつて「寺を立て学を延べ、身を忘れ道に為し」、彼の地に死んだ竺法乗らの人物の輩出も見ている。さらに注目すべきは、『魏書』釈老志に「敦煌の地は西域に接し、道俗交わりて其の旧式を得、村塢相属りて多く塔寺有り」と説かれるように、この時期すでに「寺廟圖像」⁽¹⁵⁾があつたことである。

十六国の時期は、わずかばかりの少数民族の支配者たちが仏教を推進するのに力があつた。前秦の符堅は襄陽を奪取した後、高僧釈道安と文人の習鑿齒を獲得した。

符堅は人に、自分は十万の士卒を以て襄陽を取つたが、得たのはただの一人半であつたと語つた。人がそれは誰であるかと問うたところ、釈道安が一人で、習鑿齒が半人であると答えたという。また大和尚鳩摩羅什を得んがため、符堅は大将呂光に七万の兵を帶同させて西の龜茲を討たせもしている。後趙の石虎は、魔術を弄する大和尚仏圖澄に対して五体投地し、「衣は綾錦を以てし、乗は雕輦を似てす」るほどに厚遇し、司空を遣わして朝夕その機嫌を伺い、さらに国家軍事をまかせて、これを参謀に加えた。このように河西地方では「張軌より後、世は仏教を信ず」るありさまであつた。北涼の沮渠蒙遜は、高僧曇無讖を崇敬して「生死を同じうするを誓う」という情況であり、その訳經や造像の活動は空前の盛況を呈した。唐道宣の『集神州三宝感通錄』巻中にはこの時期の情況について次のように記している。すなわち「涼州石崖の瑞像は、昔沮渠蒙遜、晉の安帝の隆安元年（三九七）を以て涼土に据えて有ること二十余載、隴西の五涼、斯く最も久しく盛んにして、専ら福業を崇ぶ。国城寺塔の終するを以て固と云うに非ず。古来帝宮は終に

は煨燼に逢い、若しくはこれを立てるに依りても、效は尤も斯く及ぶ。また金宝を用いるも終には毀盜さる。すなわち山宇を顧眄するに、以て終天たるべし。州の南百里の、連崖綿亘にして東西を測らざるにおいて、就きて窟を斫つ。安んじて尊儀を設けるに或いは石、或るいは塑にして千變万化たり。敬礼ある者、驚きて心目を眩わす」と。これは恐らく武威の天梯山石窟について述べたものと思われる。四二〇年以後、沮渠氏は河西全体を占有し、「酒泉の中街に浮屠を起て、石像を雕」したという。この中街の浮屠や彫像はすでに失われてしまったが、解放前酒泉で出土した「高善穆造釈迦得道塔」「程段兒所造塔」「田弘所造塔」「馬德所造塔」などは、いずれもこの北涼時代の仏教遺物であり、沮渠氏の仏教篤信を伝える証左でもある。

十六国時代は支配者が仏教を信奉したことから、今日の甘肅省内の炳靈寺石窟、麦積山石窟、敦煌莫高窟等の諸窟は、いずれもこの時代の機運に應じて出現した。

莫高窟は敦煌県の東南二十五キロに位置する。石窟は鳴沙山東麓の断崖に東に向つて開かれ、三危山とは右界



第275窟 本尊菩薩交脚像（北涼）

虎は、沮渠蒙遜に捕えられ、ために「鬻は銀三千斤、金二千両を以て元虎を購」ったという。この種の経済上の実力が、敦煌の開窟や造像、壁画制作の物質的基盤となつたのである。

十六国時代、涼州は北部中国の文化の中心地であり、敦煌はまたその涼州文化の中心であった。とくに儒学が盛んで、全国の名だたる儒学者も少なくなかった。たとえば、前涼においては敦煌の人宋綽が弟子三千余人を擁し、また祈嘉には二千余人の門弟があった。西涼では敦

莫高窟に現存する石窟は四百九十二を数えるが、楽傳や法良の窟がどれであるかについては、結局のところ知るすべはない。石窟の編年によれば、十六国晩期に属する石窟は七窟存する⁽¹⁷⁾。この時期の絵画や塑像の主題は、主要なものに仏をはじめとして菩薩、千仏、説法図があり、さらに仏伝図や説話画の「毗楞竭梨王本生」「尸毗王本生」等が掲げられる。この種の主題が、インド以来のものであることはまず疑いない。ただ他ならず中国は当初から漢民族固有の思想によってインド仏教を受容し、解釈してきたのであり、仏教の芸術も敦煌において

河を隔てて東西に相望まれる地である。莫高窟の創建については、唐の武周聖暦元年（六九八）、李克讓の重修を記した『莫高窟仏龕碑』に「莫高窟、それ初めは秦の建元二年（三六六）沙門樂傳有り。戒行清虚にして、執心恬静なり。嘗て林野を杖錫し、行きて此山に至り、忽として金光を見る。（その）状は千仏の有る（以下五字欠）、窟一龕を造る。次に法良禪師有り。東より此に届り、また傳師の窟の側に更にすなわち營建す。伽藍の起こりは、二僧に濫觴す」と見えている⁽¹⁸⁾。

は濃厚な漢文化の民族的色彩とともに、敦煌独自の地方的色彩をも帯びてあらわれてくる⁽¹⁹⁾。

ところで、敦煌の十六国時代の仏教芸術は、当時の敦煌地方における経済や文化の発展を前提としている。十六国時代、敦煌は前涼、前秦、後涼、西涼、北涼に前後して統治されたが、そのうち影響が比較的大きかったのは前涼と西涼、北涼である。西晋の「八王の乱」以来、中原は乱れ、「秦、雍の民の死する者は十の八、九、ただ涼州のみ全し」⁽²⁰⁾、また「中州の難を避けて来たれる者日月相繼ぐ」ありさまで、前秦の建元末年には、さらに漢人の一万余戸を江に移し、中州の人七千戸が敦煌に到っている⁽²¹⁾。河西が比較的穏やかであったことから、人口が急増し、さらに塙壁をもつて組織生産の単位とするなど、封建経済にそれ相應の発展がもたらされた。敦煌だけを例にとっても、呂光が武威を占領した後、前涼の擁護者たる王穆の起兵反抗があり、王穆は人を遣わして敦煌の郭瑀と相呼応して起兵することを約すが、郭瑀は敦煌の豪族索叡と「兵を起すこと五千、粟を運ぶこと三万石、東して王穆に応」じた。また西涼の李嵩の別將朱元

煌の人闕駟が『十三州志』を著し、李嵩は自ら詩賦の才があり、敦煌に大いに儒学を興し、「靖恭堂」「嘉納堂」を建て、堂内に古来の「聖帝・明王・忠臣・孝子・烈士・貞女」の図を描いたという。また北涼では沮渠茂虔が劉宋に臣を称し、各種著作十八種、全部で百五十四卷を献じている。つまり、河西の伝統文化が敦煌の仏教芸術を生み出し、発展させる条件の一つであったのである。近年、嘉峪関や酒泉から出土する魏晋の壁画に、こうした敦煌芸術との直接の關係を見出すことができる。

三 東陽、建平、その迹を弘む

北魏太平真君三年（四四二）、太武帝拓跋焘が兵を遣わして敦煌の沮渠無諱を討つと、無諱は城を棄てて敗走し、さらに西涼の李嵩の孫李宝がこの機に乗じて伊吾から敦煌に返り、表を奉じて魏に降った。北魏は李宝の弟懷達を敦煌太守に任ずるとともに、李宝を使持節侍中・都督西陲諸軍事・鎮西大將軍・開府儀同三司・領護西戎校尉・沙州牧・敦煌公に封じ、玉門以西の広大な地域を統轄させ、三年後（四四五）には、李宝を徴して

入朝せしめた。したがって、北魏が敦煌を完全にその支配下に置くに至ったのは、四四五年以後のこととしなければならぬ。

北魏が敦煌を支配した当初、敦煌には敦煌鎮が置かれた。孝明帝の時、鎮を廃し、瓜州改め敦煌郡とし、後にまた義州と改めた。孝莊帝が即位すると(五二八)、また瓜州に改め、西魏、北周はそのままこれに従った。

南北朝の時代は、中国の仏教の発展において最も高揚をみた時代である。北魏の仏を事とし、これを妄信したことは、『魏書』釈老志と『洛陽伽藍記』にその記録が見え、さらに北方の各地には、今なお実際の遺物としての石窟寺が存している。ところで、北魏の仏教の発展は、また涼州と直接の関係がある。すなわち、『魏書』釈老志には「太延中、涼州平ぎ、其の国の人を京邑に徙す。沙門、仏事皆東し、象教弥増す」とあり、北魏仏教の盛衰がいずれも涼州から赴いた玄高、曇曜、師賢らと重大な関係にあったと知られる。

北魏時代の敦煌についてわれわれの知るところはごく少なく、碑碣の記載は見られず史書の記録も乏しく、

『魏書』地理志・瓜州の条はほとんどが空白で、これと『晋書』地理志の、敦煌郡を涼州八郡の最たりとする記載とは、明白な対比をなしている。こうした状況をどのように解釈すればよいのか。種々推測することは可能であるが、定説は得られず、史料が不足することからも、北魏時代の莫高窟については、われわれはただ個々の窟を論じられるにすぎない。

さて北魏時代の敦煌莫高窟は、われわれが編年を進める以前においては、その時期と認め得る窟は少なくなかった。編年を経た現在は、十窟が知られ、これに窟前の発掘によって新たに発見された壁画も塑像も存しない三窟を加えて、都合十三窟を数える。

この時期、石窟の形式は次第に統一される傾向にあり、多くが人字披や中心塔柱をそなえる窟である。壁画の構成は、上から下へ大きく数段に分けられ、窟頂を一周しては天宮伎楽を繞らし(人字披下には大幅の説法図、降魔変を描く)、第二段には千仏、第三段には説話画、第四段には葉叉をそれぞれ描く。第二五七窟は、この種の構成を代表するものと言える。壁画の内容は前代を踏襲

する主題のほか、「摩訶薩埵捨身飼虎本生」「鹿王本生」「難陀出家因縁」「須摩提女因縁」「沙弥守戒自殺縁品」が新たに登場する。

北魏の時期、僧尼の宗教活動は「坐禅」に重きがかけられ、塑像の題材である弥勒仏や菩薩、苦行、禪定、あるいは壁画における千仏、上述の説話画などは、いずれも「坐禅観仏」に関連するものである。

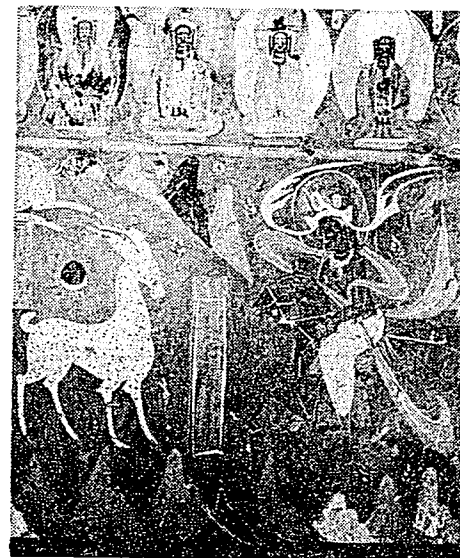
武周聖曆碑には、楽傳、法良の後に次のように述べられている。すなわち「復た刺史建平公、東陽王等の各大窟を修する有り。而して州の黎庶を合して造作し相仍ること、実に神秀の幽岩、靈奇の淨域なり」「爰に秦の建元の日より大周聖曆の辰に迄り、楽傳、法良はその宗を發し、建平、東陽はその迹を弘む……」と。莫高窟に現存する北朝窟を見れば、「建平、東陽はその迹を弘む」の一文は決して浮誇の讃辭ではないが、ただ人物の前後は置き換えられて、「東陽、建平はその迹を弘む」と称すべきである。なぜ前後が顛倒しているのであろうか。宿白氏は二つの可能性を示されたが、わたしはもう一つ「倒叙法」とも言うべき可能性を加えたい。ここに二つ

ばかり例を挙げると、第一には『周書』『北史』『隋書』に、建平公于義が「西兗、瓜、邵三州の刺史を歴」と言うが、この記述自体倒叙されたもので、われわれの考証に依るならば、于義がその任にあった先後は、邵、瓜、西兗の順でなければならぬ。第二に、『新唐書』于義伝に、永徽四年、于志寧が右僕射張行成、中書令高季輔とともに田を賜ったことを記し、時に「志寧奏して、臣家は周魏よりこのかた、世々閭中に居り、貴業墜ず……願わくば臣の有余を以て不足の者に賜らんことを」とある。于志寧は建平公于義の孫にあたり、彼はその家柄を追述するにあたってまず北周を説き、次いで北魏を説いており、これもまた倒述と言える。史書にはこうした記載がしばしば見られ、必ずしも珍しくはない。

さて『魏故金城郡君墓誌』によると、魏の明元帝四世の孫元榮は孝昌元年(五二五)以前に瓜州刺史に出任し、敦煌に到っている。この時すでに六鎮の蜂起が始まっており、河西の涼州もまた「州に据りて反」いた。關隴の乱發生の後、永安二年(五二九)には、元榮は東陽王に封ぜられる。元榮もまた仏法を篤信し、敦煌に到って後



第285窟 西壁全景（西魏）



第257窟 鹿王本生図（北魏）



第259窟 仏坐像（北魏）

の写経も少なくないが、「王路塞に否がれ、君臣、礼を失う」情勢にあつては、いっそう仏の保佑を祈求し、これによって「四方附化」されねばならなかった。五三一年、閼隴の蜂起は失敗に終わったが、北魏もまたほどなくその支配に終わりを告げ、政権は宇文泰、高歡の手に落ち、北魏は東魏と西魏に分裂した。西魏の治下に置かれた瓜州では、そのままだ統十年（五四四）の前まで元榮がずっと刺史の任にあつた。仏法を妄信した元榮の、刺史として瓜州における二十年に近い期間にあつて、およそ莫高窟で創建された石窟は、その殆んどが東陽王元榮に直接あるいは間接に関係し、しかも造営は支障なく順調に進んで、こうしたことの影響は当然のことながら「一大窟を修す」ことよりはるかに大きなものであつた。現存の西魏の七窟を見ると、とりわけ大統四、五年（五三八―五三九）の題記のある第二八五窟が、その石窟形式、壁画の内容、芸術様式の何れにおいても、明らかに新たな発展を遂げているのが認められる。すなわち、方形で斗を伏せたような窟頂の窟形は、当期に開花した新様を示すにとどまらず、のちの石窟の基本形式ともなつ

たものであり、壁画はその内容に七仏や「五百強盜成仏」の物語のほか、東王公、西王母、伏羲、女媧、風神、雷神、開明といった漢民族の伝統的な題材が出現している。さらに芸術の様式においては、南朝の「秀骨清像」の画風が、窟前に吹く春風の一夜にして梨花を綻ばせるように、その典雅高潔の作風を突如壁画の上に現わすのである。

中原の王朝は皇室の成員を長期の太守として敦煌に派遣したが、東陽王はその劈頭を飾る人物であつた。この時、この地の敦煌芸術はかしこに郁々として中原芸術の芳香を漂わせ、人びとは自ら欣然として、莫高窟における「其の迹を弘む」領袖として東陽王を推戴することに同意したのである。

建平公于義については、史伝は簡単で、仏法を尊崇したという記述はなく、ただ武周碑に莫高窟において「一大窟を修す」と述べられているにすぎない。于義一族は北魏に興って一世の顕赫となり、西魏、北周を経て隋、唐に到つても衰えず、とりわけ北周の時期はその一門に十大將軍を輩出するほどの繁栄をみた。于義が瓜州の刺



第276窟 文殊菩薩（隋）



第427窟 仏三尊（隋）

なった。

隋代の西域各国との交易往来は、北周に比していつその発展を遂げた。『隋書』裴矩伝は「時に西域の諸蕃、多く張掖に至り、中国と市を交す。帝、矩に令して其の

史であった時、その赫々たる地位は西魏の時期における東陽王に決して劣るものではなかった。建平公所建の窟を、われわれは第四二八窟と推定しているが、わずかに一窟ながら、窟の内容たるや「其の迹を弘む」と称された盛名に背くものではない。⁽²⁴⁾

北周の石窟は全部で十二窟あり、新たに出現した内容には、浮塑の羽人、壁画では「仏伝（全）」「睽子本生」「毗盧舍那仏」「五塔」「涅槃變」「須闍提太子本生」「賢愚經・善事太子入海品」「須達拏太子本生」「微妙比丘尼緣品」「福田經變」などが掲げられる。こうした多くの新たな内容が一気に出現していること自体、「其の迹を弘む」ことを物語るに他ならないと言える。

北周の石窟においては、人びとはいたるところに建平公の存在を感じ、その存在について想いをめぐらすことが出来よう。すなわち、供養者の行列にあつては、そこに建平公の題名結銜がなくとも、その形象が高大かつ氣宇軒昂で、頂上に華蓋を掲げ、頭に籠冠を戴く男子があれば、それは当時この地においては建平公以外にはあり得ず、しかもこうした形象は説話画にあつては国王、大

臣として、天宮の伎樂においては昇天の長者としてあらわされる。さらに「五百強盜成仏」の物語では、西魏の表現手法とは異なり、画面の三分の一を国王が派遣する大將出征の景に於て、大將の出征に際しては、その背後に華蓋をさしかける侍者が従っており、西魏の図には本来これらが描かれていなかっただけに、「強盜」を包圍殲滅して前を行く將軍を、誰しも「一門十大將軍」の建平公と思わぬわけにはいかないのである。

四 南北を破斥し、業を継ぎて道を拓く

隋の文帝楊堅は、五八九年、陳を滅ぼし、三〇四年の劉淵の起兵以来二百八十余年にわたる南北分裂に終止符をうち、北周を基礎として全国を統一するという大事業を完成させた。隋朝は短命であつたものの、後世に与えた影響はすこぶる大なるものがあつた。文帝は各種の典章制度を創始し、これは唐以後の各朝の習うところで、六部尚書制などいくつかの制度はそのまま清に到るまで踏襲された。隋の統一とその封建經濟の發展は、唐代の統一、および中国封建社會が隆盛に向うその先きがけと

事を掌らしむ」と伝え、この裴矩は西域の商人との交流を通して各国の風俗、山川、地理等を知り、『西域図記』を撰した。この書はすでに失われたが、その序言はなお残り、われわれはそこに隋以前のシルクロードがすでに發展を遂げ、「敦煌より發して西海に至るは、凡そ三道を為す」情況であつたことを知り得る。

隋の煬帝は浮誇を好み、かつ奢侈であつて、張掖において二十七八カ国参加の交易の会を挙行し、「以て中国の盛を示す」とともに、のち洛陽においてもほどなく同様の大会を催し、「蜚夷嗟嘆して、中国は神仙たりと謂」わしめている。こうしたふるまいは、もとより人民に賦役を強いて財を浪費させるものであつたが、一方では隋朝の經濟力を反映するものでもあつた。隋の煬帝は令して大会の参加者に「金玉を佩び、錦綉を被」らせたが、このことは隋代以後、敦煌の芸術において仏、菩薩の服飾に錦衣、玉佩の現われることを想起させ、まさしく隋代の物質文明を直接反映していると言える。

南北朝の時代は、南北が分裂したことによって仏教もまた南北に分かれ、「南は義理を重んじ、北は禪行を重

んず」という情勢であった。隋が全国を統一してから、仏教にも「禪義均宏」が提起され、南北が統一された。

隋の文帝は仏法を篤信し、仁寿年間（六〇一―六〇四）には数回わたって各州において舍利塔を建立する旨詔が下され、詔命ははるか敦煌にまで達した。こうして最高統治者の提唱の下、わずか三十七年間の隋代ながら、敦煌莫高窟においては七十七もの石窟が数えられるのである。

隋代の石窟は大多数が方形伏斗状の窟頂をもち、西窟に一龕を開くもので、個々の窟では三壁に龕を開くものもある。前代と異なるのは龕の位置が高くなって、龕そのものも奥行きを増し、さらに龕縁が二層（双層龕とも称す）になって、塑像はその題材を増加させていることである。すなわち、一仏二弟子二菩薩のほか、一仏二弟子四菩薩、さらに個々の窟では十大弟子（第四一二窟）、他の中心柱窟では三組の一仏二菩薩（第二九二、四二七窟）があり、また三世仏（第二四四窟）や四天王二力士（第四二七窟前室）も出現をみている。

隋代の壁画の内容は説話画が減少する一方、経変画が増加し、各式各様の「累世苦修」「忍辱精進」の主題は、すでに「西方極樂世界」「方便成仏」にとって替えられている。経変画の種類としては維摩詰経変五幅、東方藥師経変四幅、法華経変三幅、弥勒経変一幅などがある。この時期の経変画は種類が多くなく、あるものは画面が簡単で、画幅も大規模とは言えぬものの、これらは唐代の大幅の経変画の雛形をなすものである。このように各方面から見ると、隋代はそれぞれの分野において前を承け後を啓く、すなわち業を継いで後に道を開く過渡の時代であったと言えることができる。

五 大地の形容は盛にして、

靈光を絵画に宣ふ

唐代前期は、中国封建社会が最も隆盛を極めた時期である。『隋唐嘉話上』には「貞觀四載（六三〇）、天下康安にして断死の刑に至るもの二十九人のみ。戸、夜に閉ざさず、行旅は糧を齎さぬ也」とあり、また杜甫は彼の『憶昔』の詩中で、「憶う昔、開元全盛の日、小邑猶蔵

において用いられていたことを物語っている。

す万家の室、稻米脂を流して粟米白く、公私の倉廩俱に豊実たり。九州の道路に豺虎無く、遠行するに吉日に出ずるを勞せず、齊執魯綺の車班々として、男耕女桑相失わず。宮中の聖人雲門を奏し、天下朋友、皆膠漆たり。百余年の間未だ災變なく、叔孫礼樂肅として何をか律せん……」と述べており、この時期の敦煌は、その農業經濟に發展がもたらされた。「大守到来して山泉出で、黃沙磧里に、人、田を種ゆ」という岑参のこの二句の詩は、地方官吏が総じて水利建設を重視した情況の下、働く人びとが水利を興し、戈壁灘の上に耕地面積を拡大していくといったありさまを物語るものである（水さえあれば、戈壁灘にも耕すべき土地の多いことは、今日も変らない）。さらに敦煌遺書殘卷から見ても、敦煌の当時の灌漑渠道はすこぶる多く、主要な干渠、支渠は三十七道を数え、主な渠道が「三丈渠」と呼ばれるのも、渠道のさしわたしが三丈あったことから名づけられたもので、その水利の發達がうかがわれる。農業の生産工具もまた改良が加えられ、第四四五窟の弥勒経變中に描かれた「曲轆犁」など、まさに当時最先端の農業生産の用具が、すでに敦煌

記録と言える。

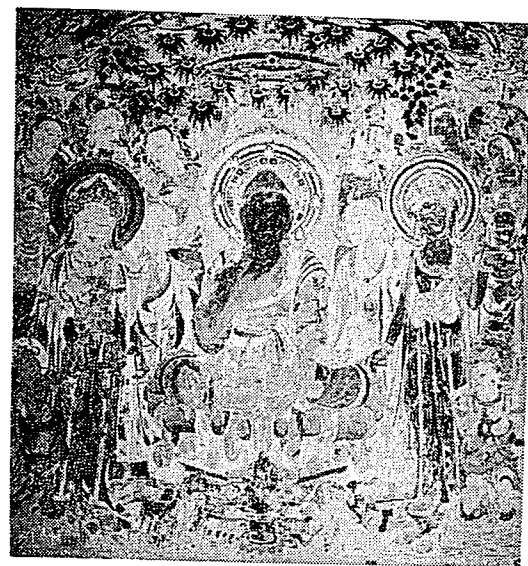
唐代前期の仏教活動は、玄奘をもつてその代表とすることができ。太宗は仏教と道教を並存させて行ない、また武后はもっぱら仏教を崇敬した。李氏の唐朝は三百年になんなんとし、しかもこの間に經濟文化の繁栄をみて、これは敦煌藝術の發展にもいっそう有利な条件を整



第328窟 本尊坐仏（盛唐）

葉のすべてを尽くしてもなお余りあるほどである。
この時期の壁画配置も旧来とはうって変わり、たとえば四壁最下層の菓又はもはや出現せず、その位置は供養者によって占められるか、あるいは壁面いっぱいを覆う大幅の図によって替えられている。さらに四壁上端の天宮伎楽もここでは窟内壁に沿って飛翔することはなく、「西方極樂世界」の一員として、あるいは天空を翔翔し、あるいは天台や楽池に向い、仏を圍繞しつつ供養奉仕する姿にあらわされる。また千仏は大部分が、その位置を窟頂へ高められている。かように、西壁の中央を龕の設

置場所とし、そこに塑像を安置することを除けば、その他の三壁は大幅の経変を描くことにあてられるのである。この壁面いっぱいの大規模の画の出現が、唐代敦煌壁画の特徴と言える。その規模は壮大で、人物も数多く、色彩また絢麗である。かつて魯迅先生はその『旧形式の採用』を論ずる中で、「唐にありては、仏画の燦爛たるを取る可し」と説いたが、まことその通りである。この時期の経変画としては以下のものが挙げられる。「観無量寿経変」二十六幅、「阿弥陀経変」二十幅、「法華経変」二十幅、「弥勒経変」十八幅、「維摩詰経変」十幅、「薬師琉璃光如来本願功德経変」六幅、「涅槃経変」二幅、「劳度叉闍聖変」一幅など。
中国仏教は唐代に発展を遂げ、「無情有性」の仏教哲理が当時流行をみ、また「屠刀を放下し、立地成佛す」が一種の合言葉として正式に唱えられるようになった。こうした状況の下、「累世苦修」を経てようやく成佛し得るという教説は次第にその効力を失っていった。そして仏教芸術の上には、小児が「沙を聚めて塔を成せ」ば、皆成佛を得るという「法華経変」、さらに作物は



第57窟 樹下說法図（初唐）

えた。こうしたことから、莫高窟に現存する唐代石窟は二百三十二窟、うちその前期に属するものは百二十七窟を数える。
この時の莫高窟は「前に長河を流し、波に重閣を映す」という空前の壮観を呈し、次の『武周聖曆碑』の一節はそのありさまをつぶさに描写している。すなわち「西に九龍の坂を連ね、鳴沙の飛井は其の名を擅に

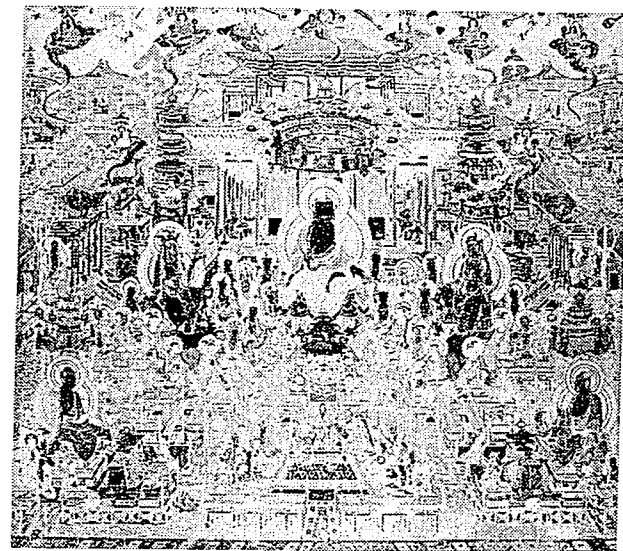
す。東は三危の峰に接して法露翔雲は其の美を騰す。左右の形勝、前後の顕敞、川原の物、麗色新たり。仙禽瑞獸其の阿を育み、斑の羽毛は百彩、珍木嘉卉其の谷に生じ、絢なる花葉は千光たり。爾、其の鏤嶠の開基、端□を植えること概日たり。山を徹して塔と為し、層台を構えて以て天に達する。石を刻みて阿育の工を窺め、檀を雕して優閑の妙を極む。……其の欄檻に昇りて絶えて人間に累さるを疑い、其の宮闕を窺いて神の天上に游乎するに似す」と。
唐代前期の彩塑は題材が増加したにとどまらず、その姿態にも種々の変化が見られるようになる。たとえば遊戲坐の大菩薩、騎獅の文殊、騎象の普賢、さらに涅槃像や弟子の群像、符拔などがそれである。さらに以前からの題材にも種々の変化が与えられて、同じ天王でもすっかり西域の「胡人」となったものもあれば、また地神ではカールした髪に鬚髯をたくわえた人物、あるいは猪頭人身獸爪の非人非畜もあり、さらには化生童子の姿なども見られる。菩薩にいたっては、名実相い伴ったおやかで多様な姿となり、それはおよそ女性美を形容する言

西暦七七五年、唐の支配階級内部に安史の乱が発生する。九年にわたる安史の乱を経て、社会経済に重大な破壊を来すと、中国の封建社会はその極盛から衰微へと向い、唐王朝はこのつまづき以来振わなくなる。こうした情勢と軌を一にし、敦煌莫高窟の芸術もまたその最高潮からしだいに下降をたどることとなる。

六 吐蕃を破却して旧国を収め、 戈矛を表進して大唐に奉る

伝播と発展は一致せず、敦煌壁画中の密教画についても、盛唐以後ようやく一般に流行するものの、題材はごく簡単に以上述べたところを出ない。

一方、三宝感応説話にもとづいて描かれた説話画は、唐代前期では初唐の第三三窟のみに見え、そこでは以下の説話が集中して取り上げられている。すなわち「張鷟出使西域求仏名号図」「仏曬衣石伝説」「仏図澄伝説」「阿育王拜外道塔」「康僧会東吳伝法伝説」「西晋石仏浮江」「東晋高僧得金像」「隋文帝迎曇延法師祈雨」などがそれである。



第172窟 観経变相(盛唐)

則ち一日にして「極楽世界に往生す」という「阿弥陀経変」、「薬師仏」の名号をひとたび念ずれば、一切の無救、無病、無医、無薬、無親、無家等々の苦難を逃れて救いを得、凶に逢つても吉と化し、難に遇いても祥に変ずるといふ「薬師変」等が、相応じて登場をみるのである。

唐代壁画の題材には、上述した経変画のほか、なお密教画と三宝感応説話画が挙げられる。

密教は言うまでもなく仏教における一派であるが、禅観を重んじ、真言を奉じ、法術をもつぱらにする。密教の形象には、観音が「千手千眼」に変化した^へたり、文殊が「千臂千鉢」に変化するなど、いわゆる「変相」が多く、さらに不空罽索観音や如意輪観音では三面六臂、あるいは八面六臂、十一面六臂等につくられる。密教經典の翻訳は他ならぬ三国時代にすでに行なわれており、敦煌に現存する壁画の内容から見ても、西魏第二八五窟の一部などは密教と関連するものと考えられる。また初唐の第三二一、三三四窟の東壁にも十一面六臂観音がすでにあり、その彩色は今日なお鮮やかである。ただ密教の

安史の乱以後、吐蕃の支配者が機に乗じて河西を占領する。建中二年(七八一)、敦煌は吐蕃の占領するところとなるが、大中二年(八四八)には敦煌の人張議潮が、吐蕃の内紛を機に吐蕃、漢族の民を従えて一挙に吐蕃の貴族を駆逐し、兵を進めて河西を回復した。唐朝は張議潮を瓜、沙、伊、西等十一州節度使に封ずるとともに、帰義軍を設け、敦煌は以後張氏の統治するところとなった。したがって唐後期の敦煌芸術については、これをまた吐蕃統治期と張氏統治期の二期に分かつことができ

る。

吐蕃の支配者は仏教を篤信し、僧侶の地位を大いに高め、時に高僧の何人かにまかせて直接政事に参与させることすらあった。ただ登用される高僧は、多くの場合漢人であった。たとえば、のちに張議潮のために長安に赴いて上表した悟真の師洪習(音は辨、また晋、晋につくる)は、吐蕃時代は知釈門都法律兼授行教授であり、また張議潮の女婿李明振の叔父僧妙弁は、吐蕃贊普のもとにとどめられて政事に参与し、あわせて臨壇供奉を兼ねた。このように吐蕃は漢族の僧侶を僧官として登用し、こ

に吐蕃統治期の仏教芸術が、唐代前期のそれを継承して基礎とし、さらに自らの特徴を印づけるということが確定したのである。壁画中、經典に依拠して「国王」の登場しなければならぬ部分には、吐蕃贊普が大勢の從者に圍繞されつつ大王小王の前に立っており、第一五九、二二一、二二七窟等の維摩詰像下方の聴聞図、第一五八窟大涅槃像北壁の諸衆奉養圖などはそうした例と言える。張議潮が河西を回復した後は、こうした吐蕃贊普の姿はしだいに見られなくなる。主題内容の上からは、吐蕃期も同様に少なくはなく、おおむね唐代前期の内容を受けつぎ、同時にまたいくつかの新しい経変を生み出した。さらに張氏統治期には旧来の基礎の上にいつその発展があり、経変の種類が増加してその頂点に達した。

唐代後期新たに登場する経変としては、次のようなものがある。「大方便仏報恩経変」二十幅、「天請問経変」十八幅、「金剛経変」十七幅、「華嚴経変」十三幅、「金光明経変」八幅、「楞伽経変」五幅、「賢愚経変」三幅、「思益梵天請問経変」三幅、「報父母恩重経変」二幅、「密嚴経変」二幅、「楞嚴経変」一幅がそれである。この

時期の経変は、種類が増したものの形式化に向い、経変ごとの構図も類型的である。また壁面いっぱい的大幅の図もはや多くはなく、一壁面に数幅の経変を描くこととなつて、一窟にごく多くの種類の経変が描かれ、最多のものは十五種(第八五窟)に達する。この種の情況を生み出すにいたった各種の要因については、これを明らかにせねばならないが、なお今後の詳しい研究に俟つこともあり、以下はそのごく簡略な見解にすぎない。

さて、仏教それ自体の発展についてみると、これは「教判」と関連があったとすることができる。唐以前から、經典が大量に翻訳されるにともない、仏教内部には長期にわたつてその教理にいくつかの分岐を生じていった。唐に入つてからは、道教の勢力が發展を遂げ、これは仏教にとって不利なことであつた。しかも同時にその他仏教に敵対するすべての教理が、それぞれ異なる立場から、仏教に対して闘争を展開したのである。そして仏教の方は、自らの教義の防御力を強化するため、外部からの唯物主義的攻撃に共同で対処しつつ、それぞれの宗派において教判の体系を打ちたてていったのである。

「教判」とは言うまでもなく仏教各派の、おのおのの依拠するいわば観点、方法であり、その所依の經典、著述、教理に系統的批判と整理を加え、これをあらためて見定め、再構築したものである。その目的とするところについては、次のように説かれる。すなわち、仏教の一切の經典著述はたんに相互に矛盾しないだけでなく、なおかつ相互に補完するものであり、互いに矛盾するように見えたとしても、それは仏がそれぞれ異なる聴衆に、異なる時処で行なつた、異なる説教に他ならないとするのである。たとえば、天台宗では、仏教の一切の經典著述は、彼らの批判・整理を経て、「五時」と「八教」に分けられる。ここで言う「五時」は、仏が経を講じた五つの異なる時処、すなわち華嚴時、鹿苑時、方等時、法華涅槃時をさし、また「八教」は仏が五つの異なる時処で講じた内容と方法をそれぞれ分けたものである。「華嚴時」は仏教の基本的知識にすでに深く通達した聴衆に説き広めた道理で、その際講じたのが「華嚴経」なりとすること、あるいは「鹿苑時」はなお仏教を了解しない一般聴衆に講じたもので、説かれたのは四阿含経、さらに

「方等時」に説かれたのが『維摩詰経』『思益梵天所問経』『楞伽経』『楞嚴経』『金光明経』等々とするのが、その例である。唐代後期の敦煌壁画の内容は、こうした「教判」と一定の関連があつたとみることができ(30)る。

一方、一般社会との関わりからみるならば、これは唐以降の「俗講」の隆盛と関係がある。壁画中にわれわれはしばしば多くの榜題を見出すが、これは文字によって画の内容を注釈したものである。榜題は唐以前にもあり、現存するその代表的な例は、第二五四窟(北魏)の千仏の題名、第二八五窟(西魏)の發願文と供養者題記などであるが、ただこれらは「講唱」とは無関係である。唐代になると経文が登場し始め、第四五窟の「觀音経変」、第二三窟の「法華経変」などではいずれも偈が画面の注釈に用いられている。特に唐代後期の張議潮統治期、およびそれ以後に造営された石窟では、榜題の文字は経文でもなければ偈でもなく、たんに提示するだけの性格のものになつてしまふ。藏經洞出土の俗講の「話本(変文)」は、そのわずかが図を伴うものの、大部分は文だけで図はなく、文中にどこどこで「若しくは陳說せ

潮が河西を回復して以後の、特定の時期に生み出されたものである。張議潮の事蹟については、正史の記載がなく、碑刻や敦煌遺書中に散見されるだけで、それは完備したものでないにせよ一々がすこぶる貴重で、しかも二幅の出行図は彼が敦煌を離れる以前の作品であることか⁽³¹⁾ら、その芸術的価値、考証に資すべき歴史的価値を説くまでもなく、彼の生前に描かれた遺例として、まことに得がたい宝物である。

「労度叉闍聖変」は、初唐の第三三五窟（乘拱二年―八六〇）にすでに一例が見られるが、以後の盛唐、中唐（吐蕃が敦煌を統治した時期）には知られない。張議潮が河西を回復した後（八四八年）、換言すればまさに二百年近くたつてから、仏教を代表する舍利弗が、外道の代表たる労度叉を如何にして打ち負かしたかという大幅の「労度叉闍聖変」が、突如として再び登場するのであり、われわれはこの経変に、当時当地の人びとが吐蕃の支配者に反抗し、これを駆逐したという示唆の含まれていることを、自ずから思い起こされるのである。

なお唐代後期には三宝感応の説話画もさらに多くな



第17窟(蔵経洞) 樹下侍女図(晩唐)

んが為」とあることから見て、開講の際、図を必要としたと思われる。唐代文淑が長安において講を開いた時、「聴く者、寺舎に填咽す」るありさまであったという。こうしたことからわれわれは、敦煌のこの時期の壁画は画も文もあったが、画がその主なもので、俗講の法師が手に「話本」を執りつつ、窟内に講を開けば、自ずと「愚夫治婦は樂しみて其の説を聴く」ありさまであったことを想像し得るのである。

唐代後期の壁画の内容は、「快速成仏」「往生極樂世界」を宣揚したことのほか、「大方便仏報恩経変」が大

量に描かれ、「報父母恩重経変」が出現し、さらに張議潮夫婦の出行図が登場を見、壁面いっぱいには大幅の「労度叉闍聖変」が描かれるというところで示唆される情況に留意せねばならない。

唐の玄宗は、かつて『孝経』『金剛経』に自ら注し（「御注」）、このことは敦煌遺書（P. 2721）に「歴代已来、此の帝無し。三教の内外に給て宣揚し、先ず孝経を注して天下を治め、後に老子、金剛を注す」と記されている。唐の徳宗は、儒、道、仏の混淆を大に行かない、宮中において常に三教の講論を催した。こうした皇帝の提唱の下、太常卿韋渠牟などは、儒生から身を起こし、道士を経、のちまた和尚となつて、いわば儒、道、仏をその一身に体得した人物であつた。かような情勢にあつて、恩を知り、恩に報い、仏恩に報い、父母の恩に報いることを称揚する「報恩経変」、さらに『孝経』を参酌して編まれた『報父母恩重経』にもとづく経変が出現するといふことは、まさしく統治者の要求にかなうものであつたと言える。

「張議潮出行図」と「河内郡夫人宋氏出行図」は、張議

り、それらの内容としては「于闐毗沙門決海」「牛頭山」「毗盧舍那樹下晏坐」「阿育王建八万四千塔」「尼波羅火池」「末田伽羅送工匠上天睹釈迦真容」「僧伽羅國仏府首授珠像」「双頭仏」「張掖國古月支王瑞像」「南天竺弥勒白像」などの伝説が挙げられる。

七 曹氏、瓜沙を守り、三危の夕照明るし

張議潮の死後、帰義軍の政權は張氏の女婿たちが互いに争う対象となり、事実上藩鎮が割拠するのと同じ様相を呈したが、帰義軍衙門が外ならぬその割拠政權であつた。五代に入ると、かつて長史をつとめた曹議金が、九一四年に帰義軍の政權を掌握することとなる。この後、曹氏の世族が敦煌を守備すること百四十年近くに及び、こうしたことから、五代から北宋初期にいたる間の敦煌については、われわれはこれを曹氏統治期と呼んでいい。

五代は、中原が乱れ、河西走廊の西端に位置する瓜沙二州においても、東に回鶻が雄を称え、西に于闐が強盛を誇つて、これら好ましからざる東鄰西友の關係に対処

することから、瓜沙は安寧を保つことが出来なかった。宋代に到ると、瓜沙は中原の管轄下におかれたものの、ただ終始西夏がこれを窺うありさまであった。このような情勢において、曹氏はいくつ効果的な措置を構じている。五代の頃、東の回鶻と結び、西の于闐と盟するその具体的手段は「連姻」であったが、宋代になると遠く遼と交流を結び、これによって西夏に対処することとなった。これと同時に、五代、宋の間はつねに中原の各王朝に臣下の礼をとって朝貢し、承認と勅封を得るか、あるいは争って「星使降臨」を願い、自らの政権の合法性を示すことに努めたのである。また瓜沙二州の内部について言うと、敦煌遺書や敦煌石窟の造営情況、供養者題記などから見て、曹氏は次のような措置をとったことが知られる。一つには、政権、軍権、族権、神権、財権を帰義軍衙門に集中させることで、これはとりも直さず曹氏がこれら権力を一手にすることとなり、またいま一つは、官爵を加えて瓜沙の氏族や大小地主を籠絡しようとしたことである。実際曹氏の時代、帰義軍節度衙門の官吏の数は膨大で、その職権は包括し切れぬほどに拡大した。

五代、宋の時代の瓜沙は、曹氏の政治経済に対する実力が概して高く、また人びとを役する権限があったことから、莫高、榆林二窟における仏教造像と石窟造営は大いに高まりを見せた。これより前、おおそ晩唐の頃、莫高窟では一度崩壊を蒙ったが、曹氏の時代に大きな壁面にいま一度画を描くとともに、窟前の棧道を整備し、窟檐四棟を築造し、さらに第五三、五五、六一、一〇〇、一〇八、四五四窟等の大型の石窟が開かれた。しかも、莫高窟窟前の発掘によって現われた窟前殿堂遺址を見ると、二十四の遺址のうち、五代、宋の時期のものが十あまりを占めている。こうしたことから、莫高窟の景観について語る時、この時期はなおすこぶる壮観であったことが知られる。

ていた。たとえば第九八窟の供養者題記中では、「節度押衙」の任にあったものだけをとりても九十七人、知られる官衙は十八種にも上っている（制度の規定に基づいて設置すべき職官は含まない）。節度押衙はただ軍事、民政を統轄しただけでなく、農業や手工業、商業、文化、教育、宗教までも管理し、供養者の題記の官衙には「水官」「知四界平水」「知打窟都計料」「知木匠□□」「知版築使」「雕版押衙」「知金銀行都料」「弓行都料」「都画匠作」「酒司」「伎匠都料」「都勾当画院使」等が認められる。敦煌遺書を見ると、帰義軍衙門自体に手工業作坊があつて、工人たちを組織して「作坊隊」をつくり、正副隊長をおいたが、張員進という副隊長は「奇工は世に傑れ、巧勝は群を出す」ことで「衙前正十將」に抜擢されている（P. 334 卷子参照）。文化教育の方面では節度押衙随軍參謀翟奉達が高名な史学者で、のち彼は「朝議郎檢校尚書工部員外行沙州經學博士兼殿中侍御史」の官衙を得ている（P. 263 参照）。宗教の面では、歴代の曹氏はいずれも篤信で、とくに仏教を唱導した。敦煌遺書によれば、都僧統をはじめとして僧統、臨壇大德、僧正等

曹氏統治時代の石窟は、現存の情況から見て六十一窟を数える。ただ上述のいくつかの大型窟を除けば、その他はいずれも旧来の窟を改修したもので、しばしば壁画の下層に前代の原画を残している。もしわれわれがいま一度詳細に調べたとしても、現存する四百九十二の石窟のうち、曹氏の時代の手の入っていない窟を見つけ出すことなど、ほとんど不可能であろう。彼らはある時は全窟を覆い、ある時は窟門を縮小して門口の両側に自らの供養像を描き、また前代の中心塔柱の基壇にすら何体かを描いており、これらもまた、彼らの「増福延寿」の願望を満足させるに恰好のものであったのである。

曹氏の時代に新しく開かれた石窟は、旧窟の破壊を最小限にとどめようと、大部分が通道を深くとり、両側あるいは上層の石窟を避けて崖腹に奥深く開かれ、その鑿出された方形の大きな窟室は、窟室中央に馬蹄形凹状の仏壇（須弥壇）を設け、壇後部には窟頂まで連なる大きな背屏をつくっている。この種の形式は晩唐期にすでに出現しているが、異なるのは窟頂四隅の一部を掘りくぼめることで、内部に四天王を描き、これに請うて「来此

して、次のようなものがある。すなわち「北方大回鶻聖天可汗天公主」像、「大朝大宝于闐国大聖明天子」李聖天像、「北方大回鶻聖天的子勅受秦國天公主離西李氏」像、「大朝大干闥国大政大明天冊全封至孝皇帝天皇后」曹氏像、「大朝大干闥国天冊皇帝第三女天公主李氏為新受太傅曹延祿姫」供養像、さらに「大宝于闐国皇太子從連、琮原」の題記などがそれぞれである。各族の長やその一族が一つの窟に集中していることは、まさしく当時の現実を反映するものと言えよう。彼らは「側に衣冠を立てて偉れ、分けて劍佩を行い聯」ねたのであり、莫高窟芸術に少なからぬ光彩を添えている。

曹氏統治の時代は、東は回鶻と結び、西は于闐と盟したことで、中国の西北各族の間に互いに兵戈を交えて争うことがなくなり、人びとが一定の生産労働に従事し得る安定した環境がもたらされた。すなわち「瓜沙より于闐に抵るは、道路清謐にして行旅は流れるが如し」と言われるほど彼我の交通が盛んとなり、敦煌の地は「六番（諸種の蕃族）の結好は流れる如く、四塞の通歛は雨に似たり」（P. 288）と称されて使者の往来が絶えず、



第98窟 于闐国王図（五代）

鎮窟」を願うのがあらわされる。造営当初の状況を考えると、馬蹄形の壇上にはいずれもやや大型の彩塑が安置されていたらしく、現在わずかに第五五窟に数体が残るが、うち蓮台に立つ天王像は宋代塑像を代表するものである。

一方、この時期の中小石窟は、多くが龕内にわずか一体の塑造仏を安置するのみで、各壁に十大弟子や四大菩薩、天龍八部が描かれており、これら壁画の榜題はいずれも明瞭に保存されている。なお、単独像の再度の出現は、一つの注目すべき事ごとと言える。

五代、宋の時期の敦煌壁画は、その芸術性という観点

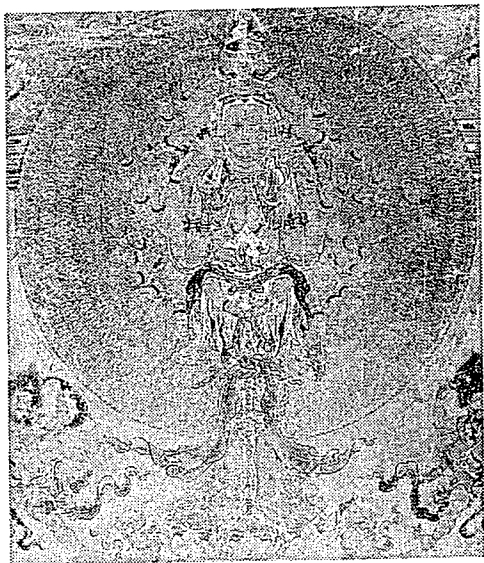
からは、自ずから唐代とは比べようもなく、「夕陽は限り無く好ましい」と形容するのが適当でしかないが、ただそれは決して「すでに黄昏に近し」というものではない。内容の上からは、唐代の二十一種の経変は「涅槃変」以外はすべてが残り、なお新たに「仏頂尊勝陀羅尼経変」や大型の「五台山図」「曹議金出行図」「回鶻夫人出行図」、さらに壁面いっぱい「劉薩訶和尚事蹟」等の登場を見た。石窟の保存状態の如何について言うなら、彩色がなお鮮やかな第六窟、規模が大きく富麗な第六一、九八窟等が挙げられ、また形式の清新さという点では、なお研究の要のある第七六窟、芸術性から第三六窟などがその代表として挙げられよう。筆者が「曹氏、瓜沙を守り、三危の夕照明るし」と見なし、一方で西夏、元時代の莫高窟を、敦煌全体から見「回光返照」、すなわち燈明の最後の輝きに似て、すでに黄昏に近づいたものとする所以である。

曹氏の、東に回鶻と結び、西に于闐と盟する政策は壁画の上にも十分反映されているが、それはことに供養者の画像に認められる。うち榜題から判別できるものと

商業が大いに盛んとなった。これはいずれも肯定すべき事ごとであるが、これだけでなく、当時于闐や瓜沙、回鶻はなおそれぞれの使者を同道させて中原に向わせ、西北各地の政權と中原王朝とのつながりを保ったのである。

八 羌笛の夜、蒲海の月を吹き、 氈廬の寒、玉関の春を阻む

西暦一〇三七年、西夏が瓜沙二州を占領し、ここに百八十余年に達する帰義軍の政權は終わりを告げた。西夏を立てた趙元昊は、すでに「蕃漢の文字に通じ」、また「仏図の学に曉」かった。少数民族が、はじめて統治した辺境で人心を撫循するには、どうしてもある種の宗教の助けを借りねばならず、それは十六国以来行なわれて来たことであり、趙元昊もその例外ではなかった。そしてその彼は「仏図安疆」を標榜するほどの仏教篤信者であった。こうしたことから、西夏統治期の敦煌莫高窟は、二百年にわたって大量の仏教芸術の作品を残すこととなったのである。ただ、これらは基本的に新たに窟を



第3窟 千手千眼観音像（元）

元王朝の勢力が西蔵に達した後は、西蔵薩迦派の密教が中国内地へと伝わり、全国に流通を見て、莫高窟にも「蔵密（西蔵密教）」が出現することとなった。

元代には全国の寺院が四万数千を数え、仏教が最高潮に達した唐代をほとんど凌駕するほどであった。莫高窟窟前の元代殿堂址の発見や「速來蛮西寧王」一族の重修になる皇慶寺は、元代の寺院が林立した状況を反映するものである。

莫高窟には元代の石窟が九窟現存するが、第三、四六五窟はその代表とし得るものである。第三窟は言わば観音洞で、大小さまざまな観音像が壁面を埋めて描かれている。特に南北両壁の十一面千手千眼観音は、内外の人が等しく讃嘆するもので、その面立ちは端正で慈愛に満ち、千臂は丸く潤いがあり、その立つ姿態は素にして飾らずといったありさまで、すらりとして麗しい。しかもそれは他ならぬ、画師の一条の描線によって描き出されているのである。美術にたずさわる者は誰しも、この画の制作者の描線に対する修練が、本図を爐火純青のもの、すなわち至高のものたらしめていると認めている。

なおこの窟の壁画の制作においては、その賦彩もまた唯一無二のものと言わねばならない。一方、第四六五窟は「蔵密」の代表であり、四壁上部には「明王像」、下部には織布、養鴨、牧牛、制陶、馴虎、制皮、踏碓等にはびる人物の図六十余幅をそれぞれ描き、各幅画面の傍に紙箋に画の内容を示し、上半はチベット語の音写、下半は漢語であらわされる。これらの人物図は、当時の社会の側面を研究する際の形象資料である。



第409窟 西夏王供養図（西夏）

開いてのものではなく、いずれも前代の石窟を改修してもたらされたものである。基礎的編年に従えば、現存する西夏期の石窟は七十七を数える（このうち十四窟には、二つの時代の壁画が共存する）。

西夏の塑像は、第四九一窟にわずかに残る二体の供養天が当初の作であり、他に西夏の作風と言い得るものは多くない。壁画の題材は簡単で、多くの場合経変画でもわずかに楼台亭閣、仏説法、天人圍繞、蓮華、水池、化生を描くだけで何ら物語的情景はなく、描かれた主題すら明らかでない。なお単独の薬師仏は西夏時代に比較的

広く扱われた主題である。また壁面いっぱい、緑色を地として描かれた千仏や浮塑貼金の五龍の藻井は、莫高窟の西夏石窟を格別印象づけるものと言える。芸術水準や歴史的価値という観点からは、第四〇九窟の回鶻の装束をまとう西夏の男女供養者と窟頂の紅色を地とする団花図案、さらに第二二三窟東壁の文殊・普賢変、第一三〇窟窟頂の団龍藻井と飛天等が、いずれも西夏時代の代表作とされるものである。

西暦一二二七年、元の太祖チンギス・ハンは沙州を攻めて陥し、「八都大王」の管轄下に置いたが、至元十四年（一二七七）にはまた沙州を立て、十七年さらに沙州路に昇格させて甘肅行中書省に属せしめた。

元朝は儒家の思想を重視したほか、道教、仏教、イスラム教、キリスト教とともに信奉し、とりわけ儒仏道の「三教平心」、すなわち「仏を以て心を治め、道を以て身を治め、儒を以て世を治め」ることに力を入れた。仏教の信仰の面からは、大いに「国師」「帝師」を任じ、およそ官を設ければ、そのいずれもが僧俗併用のものであった。

九* 風は檉柳を揺して千里に空しく、
月は流沙を照して一天を別つ

元末明初の敦煌は、文献の記載に乏しい。永樂三年（一四〇五）には敦煌に沙州衛が置かれ、その沙州衛は、正統十二年（一四四七）以後、罕東衛に編入される。のち吐魯番が強大となり、哈密を侵して占拠すると、明朝は沙州の故地に罕東左衛を置いて吐魯番に対抗することとなる。正徳十一年（一五一六）、敦煌は吐魯番の手に陥ち、嘉靖三年（一五二四）には嘉峪関が閉じられて、これより西の関外は「風は檉柳を揺して千里に空しく、月は流沙を照して一天を別つ」とこととなる。こうした一つの歴史事象と一致するかにように、敦煌莫高窟では第五窟西壁に残された成化十五年（一四七九）の参詣者の題記以外、とりたてて明代の遺物は見られない。

清の康熙五十四年（一七一五）以後、嘉峪関の外は次第に回復されていった。雍正元年（一七二三）には敦煌に沙州所が置かれ、これは同三年に沙州衛に昇格して、内地からは三十六の州県の民戸がこの地に移って屯田に励

むとともに、光祿少卿汪澐が派遣されて沙州城修築を督励した。この沙州城がすなわち解放前の敦煌城である。汪澐は公務遂行のかたわら、文物にも心を寄せ、「敦煌懷古」六首、「城工告成」四首、「登沙州城樓郊看千仏洞墩台」二首、「游千仏洞」長詩一首を詠じた。その時の千仏洞（すなわち莫高窟）は、すでに「宇落ちて残碑在り、叢深く蔓草纏う」状態であった。

付記 本文は一般的な紹介の一文であるが、文中に言及した莫高窟に関する種々の資料は、他ならぬ敦煌文物研究所の研究員諸氏が多年にわたって積み上げてきた成果の一部であり、もとより筆者一人の成し得るところでなく、筆者はただこれを収集し、まとめたにすぎない。（見出しの*印は、いずれも清の汪澐の「游千仏洞」「敦煌懷古」からの引用）

注

- (1) 『中国古代地理名著選読』第一輯参照。
- (2) 河西四郡の設立年代については『漢書』帝紀と同地理等に記述の出入りがあるが、ここでは勞干著『居延漢簡考釈』の説に従う。

- (3) 『漢書』地理志注。
- (4) 『後漢書』郡国志注。
- (5) 『隋書』裴矩伝。
- (6) 『敦煌県志』から引用。
- (7) 注(1) 前掲書。

- (8) 許慎『説文解字』は「敦は怒也、詆也」と言い、揚雄『方言』は「敦、大也」とする。応劭の説は、揚雄『方言』と同じである。

- (9) 『漢書』李広利伝。
- (10) 安作璋『西漢与西域關係史』。
- (11) 『後漢書』班勇伝。
- (12) 裴岑のことは『敦煌裴太守碑』に見える。同碑文は『肅州志・沙州衛志』、徐松『西域水道記』、蘇履吉『敦煌県志』に収載。蘇履吉が『県志』編纂の際、その手元に掲本が有り、ほぼ信頼し得るものであることから、ここにその録文を掲げておく。「維漢永和二年八月、敦煌太守云中裴岑、将郡兵三千人誅呼衍王等、斬馘部衆、克敵全師、除西域之疾（音は診）、蠲四郡之害、边境艾安、振威到此、立德祠以表万世」。

- (13) この部分の引用は『三国志魏志』倉慈伝、および『魏略』所引の注所載。
- (14) 范文瀾の説による。
- (15) 『高僧伝』竺法護伝。
- (16) 本碑は敦煌文物研究所に現存。莫高窟の創建について

は、敦煌遺書の『沙州城土鏡』（五代乾祐二年—九四九年写本）は「永和八年癸丑歳」とするが、永和八年は「癸丑」にあたらず、癸丑は同九年—三五年とすべきである。なお敦煌文物研究所は「建元二年」の説をとる。

- (17) 詳細は中国・日本共同出版の『中国石窟——敦煌莫高窟1』所収「敦煌莫高窟北朝石窟的分期」参照。
- (18) 前掲『中国石窟』所収、段文傑「早期敦煌芸術」参照。

- (19) 『魏書』卷九十七。
- (20) 『晋書』張軌伝。
- (21) 『晋書』凉武昭王李玄盛伝。
- (22) 詳しくは『大公报在港復刊三十周年紀念文集』四一〇頁を見よ。

- (23) 詳細は拙稿『建平公与莫高窟』参照。
- (24) 前掲注(23) 論文。
- (25) 隋代石窟の科学的編年作業は目下進行中で、ここでは敦煌文物研究所資料室指定の石窟年代および統計にもとづいた。科学的編年を行なえば、その数字にいくらか変動がある（唐以後についても同様）。

- (26) 『統漢書』には「符拔、形は麟に似て角無し」（『後漢書』注所引）とあり。この記載と、莫高窟第三八四窟前室、第三三四窟龕外に見られる動物は同様の姿で、以前にはわれわれはこれを麒麟と見なしていた。

(27) この密教に關しての記述は、宿白氏の講義から引用させていただいた。

(28) 金維諾「敦煌壁画中的中国仏教故事画」(『美術研究』一九五八年一期) 参照。

(29) ここでは向達氏の考察に従う。向達「羅叔言「補唐書張議潮伝」補正」(『唐代長安与西域文明』所収) 参照。

(30) 「教判」に關しては、任繼愈氏の意見に従う。同「漢唐仏教思想論集」参照。

(31) 当該出行図が描かれる第一五六窟前室の『莫高窟記』に依れば、同窟は咸通六年以前に竣工しており、張議潮は咸通八年に入朝し、同十三年、長安に卒している。

(32) この参詣者の題記の、現在識別し得る文字は以下の通り。「陝西行……等……処番達……」
安妥□降……感仏威力願夷安妥人民□□成化十五年六月……。

(33) 清道光年間(一八二一—一八五〇)選の『敦煌県志』参照。

〔訳者あとがき〕

本文は敦煌文物研究所所員施萍亭女史が、同研究所編『敦煌研究』(試刊第一期、一九八二年六月刊)に掲載の「敦煌与莫高窟」の全訳である。近年中国では『敦煌学輯刊』I・II(蘭州大学、一九八〇、一九八二年)、『敦煌研究文集』(敦煌文物研究所、一九八二年)など、解放後の敦煌学の研究成果が陸續

として発表されているが、『敦煌研究』は敦煌文物研究所はじめての紀要として刊行され、施女史の他、所員一〇余氏の論考を収載する。

施萍亭女史は一九三二年、浙江省永康県の出身。蘭州大学歴史系卒業後、一九六一年から敦煌文物研究所所員となり、以来二〇余年にわたって研究および資料収集に従事し、現在は敦煌遺書研究室主任(助理研究員)をつとめる。今回訳出した「敦煌与莫高窟」は、千五百年に及ぶ敦煌の歴史の概要ながら、各種文献を広く渉猟し、また現地での調査の成果を盛り込んでなされた的確な叙述は、まさしく多年にわたり敦煌に居住して研究に励んできたもののみがもつ説得力を有し、各所に敦煌遺書を中心としてその歴史研究に業績を上げてこられた女史の学識がうかがわれる一篇である。

なお本号掲載に際し、読者の便宜を考慮して原文にない挿図を加えたが、これには鄧健吾撮影の写真を用いたことを付記しておく。

(とうけんご・成城大学教授)

(やすだ はるき・根津美術館学芸員)